

令和元年6月15日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02300

研究課題名(和文) 徳間康快による中国映画上映に見る日本人の対中国イメージの変遷(劉文兵)

研究課題名(英文) To observe the changing in Japanese impressions of China, through

研究代表者

劉文兵(LIU, WENBING)

東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員

研究者番号：70609958

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間中に著書計7冊を出版した(単著2冊、共著5冊)。単著：劉文兵著『映画がつなく日本と中国』、東方書店、2018/単著：劉文兵著『日中映画交流史』、東京大学出版会、2016/共著『動態影像的足跡』(中国語)台湾国立台北芸術大学出版中心、2019/共著『日中共同知の創造』、白帝社、2018/共著『映像の可能性を探る』、専修大学出版局、2018/共著『映画監督 小林正樹』、岩波書店、2016/共著『高倉健』、文藝春秋、2016。また40名に上る映画関係者への取材に加え、北京や上海で映画市場の調査をも実施し、国会図書館、早稲田大学演劇博物館、中国国家図書館、北京大学図書館への資料収集を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

劉文兵著『日中映画交流史』、劉文兵著『映画がつなく日本と中国』が、それぞれ「日本経済新聞」「読売新聞」「朝日新聞」「週刊読書人」などの書評欄に取り上げられ、高く評価され、大きな社会的反響を得た。2018年2月にユニジャパン・文化庁が共催した「日中国交正常化40周年記念映画上映会」のアドバイザーを務め、パンフレットを単独で作成し、上映会の開催中に登壇し、三回にわたって講演をおこなった。2018年10月29日に開催の「文化庁映画週間 日中映画シンポジウム」のモデレーターを務め、柳島克己カメラマン、テレンス・チャンプロデューサーと対談を行った。研究成果を広く発信することができた。

研究成果の概要(英文)：There are fruitful results achieved during the research period, Seven academic books had published in total：1. Personal monograph: 《Movie Links Japan and China》; Publisher: Tohoshoten; Year: 2018./2. Personal monograph: 《A History of the the Interrelations between Japanese and Chinese Films》; Publisher: University of Tokyo Press; Year: 2016. /3. Collaboration work: 《Tracing the Footsteps of Motion Pictures》; Publisher: Taipei National University of the Arts; Year: March, 2019; /4. Collaboration work: 《Explore the possibilities of image media》; Publisher: Senshu University Press; Year: March, 2018; Additional works include interviewing with over 40 Chinese and Japanese film professions, implementing film market survey among different cities such as Beijing and Shanghai, and collecting large number of literal data from National Diet Library(Japan), The Tsubouchi Memorial Theatre Museum (Waseda University), National Library of China and Peking University Library.

研究分野：映画論、表象文化論

キーワード：日中映画交流史 日本における中国映画の上映 相手国のイメージ 他者の表象 徳間康快

1. 研究開始当初の背景

日本の映画研究においては、欧米と日本という形の比較研究が盛んであるのに対して、日本とアジアという視点が希少であり、日本人が中国映画をどのように受け入れてきたのかというアプローチに至ると、本格的な研究はまだ存在しないのが現状である。

日本における中国映画の受容については、晏妮『戦時日中映画交渉史』(岩波書店、2010)、拙著『日本電影在中国』(中国電影出版社[北京]、2015)において、それぞれ言及されているものの、いずれも断片的な記述や、概論に留まっている。また、日本における中国人イメージの歴史の変遷にかんしては、上野昂志「日本映画のなかで中国はどのように描かれてきたか」、川村湊「大衆オリエンタリズムとアジア認識」のような論考がいくつか見うけられるとはいえ、それを中国映画の受容という問題とリンクしつつ、さらに文学・漫画・テレビなどの研究対象をも視野にいれた本格的な研究は皆無である。

さらに、いままでの日中映画交流史研究において、中国における日本映画の受容や、日本人イメージの歴史の変遷に関する研究が豊富であるのに対して、日本における中国映画の受容、及び中国人のイメージを扱う研究はきわめて貧弱である。このようなアンバランスな傾向は日中両国での研究状況についていえる。本研究はその空白を埋めるとともに、従来の研究に国際水準の貢献を加える。

これまで応募者は、中国における日本映画の受容史、及び中国における日本人イメージの変遷を主な研究テーマとしてきた。拙著『映画のなかの上海』(慶應義塾大学出版会、2004)、『中国10億人の日本映画熱愛史』(集英社、2006)、『証言 日中映画人交流』(集英社、2011)、『中国映画の熱狂的黄金期』(岩波書店、2012)、『中国抗日映画・ドラマの世界』(祥伝社、2013)、『日本電影在中国』(2015)などの一連の研究成果によって、中国において日本映画がどのように受容されてきたのか、または日本人がどのように描かれてきたのかといった問題が明らかになった。それに対して、応募者の今までの研究においては、日本における中国映画の受容、及び中国(中国人)イメージの形成という問題について掘り下げて分析・検討する余地がなく、関係者へのインタビューなどのフィード・ワーク的な作業がまだ十分におこなわれていないのが現状である。

さらに、近年、領土問題や歴史問題によって日中関係が冷え込み、中国に対する日本の国民感情が悪化しつつあるなかで、今後、日中がどのように相手国と付き合うべきかを考えなければならない。そこで、日本における中国映画の上映史、及びそのなかで形成された中国のイメージを辿ることによって、日中の相互理解を促進し、脱しがたい隘路に置かれている日中関係にたいして、打開の糸口を見つけるべく、本研究を着想するに至ったのである。

2. 研究の目的

本研究は、1970年代後半から1990年代後半にかけての徳間康快による中国映画上映活動を辿ることをつうじて、日本における中国・中国人イメージの変遷を考察する。徳間康快は、それまでの公式的に企画された政治的な文化交流の枠を打ち破り、政治的状况に左右されない中国イメージを提示しようとした。このような新たな中国イメージが、日本人の対中国感情にどのような影響を及ぼしたのかを解明することをつうじて、政治から離れた日中文化交流の在り方や、中国・中国人イメージの再構築の可能性を示唆することを試みる。

以下は本研究の目的を、以下の三つの観点から説明していく。**【徳間康快による中国映画上映活動の実態】**徳間グループを一代で築き上げた徳間康快は1977年から20年にわたって中国映画祭を毎年開催し、その都度、中国から監督や俳優など、著名な映画人をメンバーとする代表団を招聘し、日本の観客との交流や両国の映画人の交流を図った。その地道な努力が、政治的な文脈と離れた新たな中国のイメージをヴィジュアルな形、そして草の根の形で日本社会へ浸透させた。本研究は、関係者への取材や一次資料をつうじて、この時代において中国映画が日本へ輸入されてきた経緯を丹念に跡づけ、さらに『黄色い大地』『赤いコーリヤン』『芙蓉鎮』など中国映画の受容を手掛かりにし、中国のイメージがいかに再構成されたのかを解明する。**【日中映画交流史における徳間康快の位置づけ】**戦前から終戦まで、中国人のイメージが非効率な収奪と軽蔑すべき対象から、救済・教育・改造という再生産システムをつうじて主体化させ、大東亜共栄圏のなかへ取り込んでいかなければならない存在へと変容していったプロセスを考察するとともに、冷戦時代に日本共産党の外郭団体が、公会堂などで自主上映の形で上映していた中国映画の受容をたどることをつうじて、毛沢東の平等社会の理念を手がかりとして、ユートピア的な日本社会の未来像を探したそうとしていた、当時の一部の日本人が「中国」を欲望する眼差しを析出する。さらに、このような戦前・戦中、冷戦時代との比較において、徳間康快が打ちだした中国イメージの独自性を明らかにする。**【グローバルな時代における「徳間康快」の意義】**1990年代後半以降、ジャ・ジャンクーや、ワン・ピンらが手掛けた中国のインディペンデント映画は、一部のアジア映画ファンの中で注目を集めているとはいえ、日本での中国映画ブームが下火になり、中国人イメージの構築において映画メディアが果たした役割も著しく縮小してきた。本研究は、中国映画受容の現状を視野に入れつつ、「徳間康快」のもつ現代的意義を浮き彫りにする。

「中国」はあくまでも日本人がみずからの欲望をプロジェクトするオブジェであり、中国映画の日本への輸入も既成の中国イメージを確認する、あるいは増強するという目的でおこなわれてきたという先入観は、日本の映画研究に根強く存在する。それを覆すべく、本研究は徳間康快の活動を事例に、脱政治の文化交流のモデルが存在していたこと、そして中国映画が日本で流通していたステレオタイプ的な中国イメージを大きく書き換えたという事実を検証し、そこから良好な日中関係を築くためのモデル、あるいは萌芽のようなものを見いだすことを試みる。

3. 研究の方法

本研究は、次の三つのプロセスをつうじて遂行される。

- (1) 日中映画交流史に現れる中国(中国人)イメージの歴史的変遷の分析。
- (2) 1970年代末から90年代後半まで徳間康快による中国映画上映における中国イメージの分析。
- (3) 現在の日本における中国映画受容の現状の考察。

これらの作業によって、中国(中国人)イメージの構築において映画メディアが果たしてきた役割を明らかにするとともに、さらに今後の新たな異文化受容の可能性と他者イメージのあり方が段階的に明らかになる。本研究の遂行にあたっては、国内の研究機関である東京大学、早稲田大学、専修大学のほか、北京大学、北京伝媒大学、台北芸術大学との国際的連携をおこなう。

4. 研究成果

劉文兵著『日中映画交流史』、劉文兵著『映画がつなぐ日本と中国』が、それぞれ「日本

経済新聞」「読売新聞」「朝日新聞」「週刊読書人」「図書新聞」「キネマ旬報」などの書評欄に取り上げられ、高く評価され、大きな社会的反響を得た。2018年2月にユニジャパン・文化庁が共催した「日中国交正常化40周年記念映画上映会」のアドバイザーを務め、パンフレットを単独で作成し、上映会の開催中に登壇し、三回にわたって講演をおこなった。2018年10月29日に開催の「文化庁映画週間 日中映画シンポジウム」のモデレーターを務め、柳島克己カメラマン、テレンス・チャンプロデューサーと対談を行った。研究成果を広く発信することができた。

(1) 単著『日中映画交流史』(東京大学出版会、2016年6月)

本書は、戦前から現在に至るまでの日中映画交流の一〇〇年に及ぶ歴史を検証する、本邦初の日中映画交流通史である。戦前・戦中の上海と満州や、中華人民共和国建国初期、文化大革命期、そして近年までの日中映画交流の歴史的変遷について新たに書き下ろした内容を取り入れ、本書ができあがった

日中の貴重な一次資料に加え、高倉健、山田洋次、佐藤純彌、呉宇森、張芸謀、陳凱歌ら多くの映画人へのインタビューをつうじて、これまで知られなかった多くの映画史的事実が本書によって明らかになった。また、実証的なアプローチだけでなく、映像分析にもとづいた表象の歴史分析のアプローチも本書の特色の一つである。さらに映画学に限定することなく、より幅広く映像文化史的あるいは社会的なアプローチをとることで、当該研究分野に学際的な貢献を果たすことができた。

(2) 単著『映画がつなぐ中国と日本』(東方書店、2018年7月)

本書はチェン・カイコー(陳凱歌)や、チャン・イーモウ(張芸謀)、ジョン・ウー(吳宇森)、ジャ・ジャンクー(賈樟柯)ら幾世代にわたる中国の映画人や、日本側の関係者へのインタビューをつうじて、戦中・戦後の日中映画交流にまつわる映画史の新事実を発掘するとともに、両国の映画が相手国の人々に与えた鮮烈なインパクトや、共同製作の舞台裏をも明らかにした証言集である。

本書は「映画史の深層」と「共同製作の現場で」の二部構成をとっている。第一部では人的交流の歴史にスポットライトをあて、第二部では日中合作映画製作の最前線に注目することで、映画史研究にとどまらず、現在の中国における日本映画の受容や、日中共同製作の現状をも視野に入れ、さらに新たな文化交流のモデル、あるいは可能性を探る。

著者による日中映画交流史の概論、そして映画人交流の現場についての佐藤純子氏の証言は、全体のイントロダクションに当たる。その土台の上に、各々の中国の映画人が登場し、日本映画とのかかわりについて語っていただく。そのなかで故人についても、彼らにまつわる映画史的事実を、関係者へのインタビューや、一次資料を通じて検証していくことにより、映画人一人一人の人間像やその感情、置かれた時代を浮かび上がらせた。

論考「日中映画交流のオーガナイザー 徳間康快の「中国」は、若い頃の読売新聞社員時代から出版界へ渡り歩き、映画界に風雲を起し、ついには中国との交流に至るまでの徳間の波瀾万丈の一生を、多くの一次資料や、当事者への独自の取材に基づいて跡付け、とりわけ、徳間

の中国との独特なかかわり方に注目し、「文化交流」「映画交流」といった美しい響きの言葉に収斂されていない権力関係や実利関係をあぶりだすとともに、徳間が抱く中国のイメージ、そして、そこに見え隠れている徳間氏の一種のナルシスティックなエゴに近い強烈な欲望を析出した。なお、執筆にあたり、鈴木一（元東光徳間事業本部プロデューサー）、山本洋（元大映専務取締役）、佐藤正大（元大映プロデューサー）、佐高信（徳間康快評伝の著者）、佐藤純子（日中文化交流協会常任理事）、田村盟（元東光徳間事業本部プロデューサー・田村祥子氏の子息）ら関係者にそれぞれ取材をおこなった。また、十数年間にわたって日中映画交流の事業を、徳間康快とともに推進していた中国側の担当者で「中国電影公司」元社長の胡健氏（一九三三～二〇〇九年）の証言が中国で出版されたことで（陳墨主編『胡健訪談録』、中国電影出版社、2015年）、日中双方の思惑や欲望を検証することも可能となり、本論考はその初の試みにあたり、画期的なものである。

（3）論文「中国電影在日本」（中国語）

（共著『日中共同知の創造』、白帝社、2018年12月）

戦前から現在に至るまでの日本における中国映画の受容の軌跡を辿る論文である。とりわけ、徳間康快主催の「中国映画祭」（1977～1997年）に焦点を当てている。早稲田大学国際教養学部、厦門大学共催の国際シンポジウムにおける研究発表に基づいている。

（4）論文「日本における中国映画の受容史 徳間康快主催の「中国映画祭」を中心に」

（共著『映像の可能性を探る ドキュメンタリーからフィクションまで』、専修大学出版局、2017年3月）

本論文は、徳間康快主催の「中国映画祭」（1977～1997年）に焦点を当て、このイベントをつうじて日本に紹介された中国映画が、どのように流通・受容されていたのかを明らかにするとともに、日本における中国映画の上映・受容の歴史における「徳間康快」の位置づけを検証し、政治から離れた日中文化交流の在り方や、脱政治的な中国・中国人イメージの再構築の可能性を探ることを試みた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計6件）

1. 劉文兵著「ドアン・イーホン インタビュー 名優が語る、新世代監督作品の魅力」、『キネマ旬報』2019年2月上旬号 査読なし

2. 劉文兵著「日中映画、共同制作の新地平」、nippon.com、2018年12月 査読あり

3. 劉文兵著「日中映画交流史の流れ」『日中平和友好条約締結40周年記念 映画上映会 パンフレット』、ユニジャパン&文化庁、2018年3月。査読あり

4. 劉文兵著「変わり始めた中国映画市場」、『キネマ旬報』2018年3月下旬号。査読なし

5. 劉文兵著「中国の原節子 謝芳さんに聞く」、『東方』2018年2月号。査読なし
6. 劉文兵著「高倉健と中国人 日本映画とスター、その受容と歴史」、『外交』2016年。査読あり

〔学会発表〕(計 6 件)

1. 劉文兵、柳島克己、テレンス・チャン「日中映画製作の新展開」、文化庁映画週間 日中映画シンポジウム(招待講演)、2018年10月
2. 劉文兵「『君よ憤怒の河を渉れ』と中国人」、文化庁とUNI JAPANが共催した「日中平和友好条約締結40周年記念 映画上映会」(国際学会)、2018年3月
3. 劉文兵「日中合作映画の歴史と今後の可能性」、文化庁とUNI JAPANが共催した「日中平和友好条約締結40周年記念 映画上映会」(国際学会)、2018年3月
4. 劉文兵「中国の映画女優と日本」、文化庁とUNI JAPANが共催した「日中平和友好条約締結40周年記念 映画上映会」(国際学会)、2018年3月
5. 劉文兵「徳間康快と中国映画」日本映像学会・アジア映画研究会第二回研究会、2018年2月
6. 劉文兵「日本における中国映画の上映史」早稲田大学国際教養学部、廈門大学(国際学会)、2017年5月

〔図書〕(計7件)

1. 単著：劉文兵著『映画がつなぐ日本と中国』(東方書店、2018年8月)、376頁
2. 単著：劉文兵著『日中映画交流史』(東京大学出版会、2016年6月)、360頁
3. 共著『日中共同知の創造』(中国語、白帝社、2018年12月、劉文兵：論文「中国電影在中國」230頁-240頁)
4. 共著『映像の可能性を探る ドキュメンタリーからフィクションまで』(専修大学出版局、2017年3月、劉文兵：論文「日本における中国映画の受容史 徳間康快主催の「中国映画祭」を中心に」189頁-237頁)
5. 共著『動態影像的足跡』(中国語、台湾国立台北芸術大学出版中心、2019年3月。劉文兵：論文「電影在日抛下的中国」、433頁-464頁)
6. 共著『映画監督 小林正樹』(岩波書店、2016年12月、劉文兵：論文「小林正樹の『中国』」、449頁-459頁)
7. 共著『高倉健』(文春文庫、2016年11月、劉文兵：論文「高倉健はなぜ中国で『熱烈歓迎』されたのか」、378頁-392頁)

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。